

エルとジュリエットの 寄宿学校

ヨーグリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

18階層の階層主からベル達を次の階層に続く穴に突き飛ばしたエル。その直後階層主の攻撃を受けて死んでしまった。そんな彼が次の世界に転生して生きていく物語！

主人公は今書いている『原作に関わらないようにしたいけど神がそれを許してくれるみたい』の主人公です。

タグの沖田総司と魔神沖田総司、チートは原神から能力を引き継いでるからです。

目次

もう一度転生！	1
転生してから一人目の友達！	8
今度は高等部で……	16
再開	26
強さとは……	38
見てしまった告白と俺の心模様	54
炸裂！必殺の右ストレート！	63
タイミングと茶番そしてデコピン	76
可愛いなチクシヨウ！	92

もう一度転生！

「う……ん……ここ……は？」

「起きたか」

「あれ？なんでゼウス様がここに…… そうだ！ベル達はどうなりました!？」

（そうだ確か俺は18層の階層主からベルたちを逃がすために下の階に繋がる穴に飛ばしたんだ）

「まあ落ち着きたまえ。まずはベル君と他の子たちはお主のおかげで無事じゃ」

「よかった。それで俺はどうやったら戻れますか」

「それなんじゃが」

「何か問題でも起きましたか？」

「エルよ落ち着いて聞いてくれ」

「は、はい」

ゼウス様はいつものへらへらした顔ではなく今までで見たことのない真剣な顔をしていたため俺もつい緊張してしまう。

「お主はベル達を下の階層に繋がる穴に突き飛ばした後階層主の攻撃を食らって……死

んでしまったのじゃ」

「え……?」

「信じられんかもしれないが本当なんじゃ」

（今死んだって言った?俺が?）

ゼウス様の言葉が信じられず下を向き心の整理をしてると俺の前までゼウス様が近寄ってきて抱きしめた。

「ちよ、ゼウス様いきなり何を」

「よく頑張ったな。お疲れ様じゃ。これで二回目じゃのうお主の大切な人たちを守って自分は死んでしまうのは」

（二回目か……二回目なら上手くやれると思ったけどだめだったか……。はあ悔しいななんて俺ばかりが死んでしまうのだろう）

「まだベル達と……一緒に居たかったな」

「今ここにはワシら二人しかおらぬから全部吐き出してもいいぞ」

「う……うう……なんで俺なんですか?なんで俺ばかりが死ぬんですか!悔しいです!もつと……!もつと!ベル達と一緒にあの世界に居たかった!なんで!なんで俺なんですか……!」

言いたいことを言い終わったあとゼウス様の胸に顔を埋めて今までにないくらい泣

いてしまった。

「落ち着いたか？」

「いやー、お恥ずかしいところをお見せしました」

ゼウス様の胸から離れたいぶ落ち着きいつもの調子に戻る。

「それでこの後俺はどうなるんですか？」

「それはお主が決めていいぞ」

「俺ですか？うーん、どうしようかな」

「ちなみに一応転生先で死んでしまった者には三つの選択肢を選ぶ事が出来るんじゃ」

「三つ？」

「そうじゃ。まず一つ目がこのまま天国に行つてダラダラと過ごすか。

二つ目は現実世界にもう一度生まれ変わる。

三つ目は違う世界に転生するか。じゃ」

「同じ世界に転生する事つて出来ないんですか？」

「出来ないんじゃよ。こればかりは昔から決まってる事でのう」

「そうですか。あ、それともう一つ聞きたいんですが俺以外で今担当してる転生者つているんですか？」

「おらんぞ。まずワシの所に来る人は滅多にいないんじやよ」

「そうなんですか?」

「うん、ワシの所に来るにはある条件を満たさなくてはならないんじやよ。それでお主はその条件を満たしてるからワシの所に来れたんじやよ」

「へえ、んでその条件ってなんですか?」

「これは絶対に教えてはダメなんじやよ。だがワシは知つての通りルールとか関係なしになんでも自由に来るからなだからお主は当たり前なんじやよ」

「やつぱりこの神チートだ...」

「まあ、ワシじゃからな」

「それならもう一度他の世界に転生したいです」

「作品はどうする?」

「あーまだ決まってるないんですよね」

「それなら」

パチン。ドサドサドサ

ゼウス様が指パッチンするところからともなく沢山のラノベとマンガが降ってきた。

「ええ!!」

「この中から決めていいぞ」

降ってきたラノベとマンガは全部俺が好きだジャンルのもものばかりだった。

「お主の頭の中を覗いてお主が好きそうな物を出しておいたぞ」

「え？頭の中を覗いた？」

「そうじゃ」

「俺のプライベートが…」

それから二週間後経った。え？時間が進むのが速い？知らんな。

「これは…」

俺が見つけたのは最近人気の『寄宿学校のジュリエット』だった。

「そういえばまだこれ読んでないな。とりあえずこれを読むか」

読み始めてから二時間が経った。

「ふう、読み終わったー」

他の本を合わせて長時間座りっぱなしだったためその場に立ち上がり軽く準備運動をする。最後に股割りをすると背中から今まで以上に骨がポキポキと鳴った。

「このマンガ面白かったな。結構この作品好きだな。よし！」

(確かにこの辺にベルがあったはず…お、あった)

ピンポーン

「どうした」

「転生する作品決まりました!」

「なんの作品じゃ?」

「『寄宿学校のジュリエット』をお願いします」

「了解したぞ。あ、そういえばまだお主には前の世界の転生特典が残ってるんじゃないよ。もちろん刻んでもらったファルナもな。もしお主がいらないうのならば消せるがどうする?」

「このままでお願いします。これは俺があの世界で生きていた証なので」

そうやって『煉獄』を具現化させる。

「そうか。では最後に原作知識は消すか?」

「消してください」

「わかったぞ。それじゃあ転生させるぞ」

「はい!では行つてきます!」

—————

はい、どうもヨーグリーです。

今回は試作品です。原作は『寄宿学校のジュリエット』です。

書いた理由ですが寄宿学校のジュリエットのssを読んでたら書きたくなったのが理由です。原神の方で物語が後半まで行ったら本格的に書いていくつもりです。そのため試作品です。

それと自分はまだ原作とアニメどちらもまだ見てません。原作は一応発売している物は全部買ってあるのですが如何せん仕事の方が忙しくて一巻すら読めてないんですよ。

ですので今回の試作品で原作と違う所があると思いますがご了承ください。

原神の方は明日にでも最新話を投稿します。

それではまた次回！

転生してから一人目の友達!

この世界に転生して5年が経った。一応『煉獄』が使えるか確認したがちゃんと使えた。けど今の俺はただの五歳児だから前の世界の身長の二倍の武器は使えるはずもなく当分『煉獄』はお預けになってしまった。それにこの世界は前の世界と違ってすごく平和だった。ただしとあることを除けば…

「いいかエル? 東和国とウエスト公国の二つはいがみ合ってるがいつかきつとお父さんとお母さんみたいに国とか関係なく仲良くなれるんだ。だからエルは俺たち二人みたいに東和国やウエスト公国とか関係なくみんな平等に接してほしい。ま、今のエルに言ってもわからないか」

そう言つて笑いながら俺の頭を撫でる人。この人がこの世界での俺のお父さん、その後ろで優しく微笑む女性がお母さんだ。

確かに俺が転生者じゃなく普通の子供だったらわからなかったかもしれないが俺はそうじゃない。だから俺はお父さんに言う。

「うん! 難しいことはまだわからないけどいつか僕はお父さんとお母さんみたいになる!」

俺は出来るだけ子供っぽく言う。

「そうか！それでこそ俺ら二人の息子だ！」

そうこの世界は東和国とウェスト公国の二つがあつてこの二つの国は敵対関係にあつた。その中で俺の親は高等部時に今の二つの国の考えがダメだという考えが一緒だったためまずは自分たちの通っている高等部から変えるという目標を密かに立てていたらしい。そして二人は周りに今ではいけないという事を伝えたが誰も聞き入れてはくれなかつた。もちろん二人のとても親しい友人たちは最初の方は納得してくれたが結局最後は諦めてしまった。ついには二人も高等部を卒業するころには諦めてしまった。その後二人は普通の恋人として付き合い10年前自分たちの親族だけを呼び結婚式に呼びび式を挙げたらしい。これがお父さんから聞いた話だそれに今でも高等部に立てた目標はまだ諦めてきれないらしい。

（それなら俺が二人の目標を達成させてみせる！まあ明日からでもやつていけばいいが今の俺には仲がいい友人がいらないんだよな。だからやるなら高等部からだそこで俺は頂点に立つて高等部から変えて次に初等部、最後に中等部の順番で変えていく）

ちなみになんで初等部と中等部の順番が逆かというと、初等部でいくら生意気な子供いたとしても根は素直な子が多いはずだから先に初等部からなのだ。決してロリコンとかじゃないからな！

(そのためには今より多く勉強してそして今度は自分も死なずに誰かを守れるくらいに強くなる!けど今日は遅いし明日からでいいや。そういえば現実世界にいたときには誰かが『明日やろうはバカ野郎』って言ってたな)

それから勉強終わったら修行の日々続いた。最初は頑張ってるな程度でしか見てなかった親だが一カ月過ぎたころから少しずつ心配されることが多くなった。こんなの前の世界に比べたらどうつてことないだがそんなことは親には言えないから、『僕ね!お父さんとお母さんが出来なかったことを今度は僕がやるんだ!だから頑張る!』と言った。そして二人は泣きながら俺に抱き着いてきた。それから二人はその日から少しずつ俺に甘くなっていた。その理由に聞いてみたら『自分では気づかなかもしいないが身体は少しずつ疲労とかでストレスが溜まるものだ、だからストレス解消というわけではないが俺ら二人が出来ることはこれくらいしかないからな。だからきつくなったらいつでも言いなさい?』と言ってきた。正直めちやくちや泣きそうになつたがそこは我慢した。

さすがにこれ以上親に迷惑をかけるのはダメだと思い勉強と修行がの時間を減らした。そして減らした分の時間はウエスト公国が自分たち東和国の反応を見るためにウエスト公国付近の公園で一人いる時間を作った。だけどその公園は滅多に人が通ら

ず通つても誰も公園には見向きもしなかった。

ただどいつもみたいにその公園のベンチでボーっとして時間を過ごしてたら入り口の方から金髪で髪が肩まで伸びてる一人の少女が立っていた。数秒目が合うとその少女はこちらに向かつて歩いてきた。

「ねえこんな時間に何してるの？」

「そういう君こそ何してるの？」

「私は少し散歩してたの。それであなたは？」

「僕はいつもこの時間に来てこうやって何もしないでボーっとしてるんだ」

「それって楽しい？」

「うーん楽しくはないかな」

「じゃあなんでやってるの？」

「この公園ってあまり人が通らないんだよそれで静かだからこうやってボーっとしてると落ち着くんだ。君も一緒にどう？」

「… うん」

そう言つて俺の隣に座る。そして五分ぐらい経つと女の子が口を開いた。

「なんか落ち着く」

「でしょ？」

「うん。でもなんであなたはここでこんなことしてるの」

「実はウエスト公国が僕みたいな東和国の子供の事をどう思ってるのかなって思ってた。反応を見るためにここに来たんだけど人が全然通らなくてそれでもこうやってここで人が通るのを待ってたらこうやってポーっとしてるのが習慣になっちゃったんだ」

「あなた東和国なんだ」

「そうだよ」

「へえ」

「あれ？君は他のウエスト公国の子みたいに何か言わないの？」

「なんで？どうして東和国だから悪口とか言わないといけないの？私はそんなの違うと思う」

（へえ、俺以外にもこういう子はいたんだ）

「そっか僕と同じだね！」

「同じ？」

「うん！僕もね相手がウエスト公国だから悪口を言うのはいけないことだと思ってる。それで僕には叶えたい夢があるんだ」

「夢？」

「うん！僕のお父さんは東和国でお母さんウエスト公国なんだ！それで二人は国が違う」

から悪口を言ったりするのは良くない！ってよく言うんだ。それで二人は高等部の時にこんな世界を変えるという目標があったんだけど結局変えられなかったんだ。だから僕がお父さんのお母さんの代わりにこんな世界を変えるんだ！」

「なんかすごいね」

「でしょ？だから…… 最初の一步として僕と友達になつてください！」

女の子に向かって頭を下げて右手を出してお願いをする。

「いいよ！私もあなたの夢を手伝ってあげる！」

そう言つて俺の右手を握つてくれる。それにさつきまでは少し暗い感じだったがいきなり明るくなった。きつと少し警戒をしていたのだろう。

「ジュリエット」

「え？」

「私の名前。ジュリエット・ペルシアだよろしくね！… えーと」

「僕はエル！神崎エル！よろしくねペルシアちゃん！」

—————

それから俺とペルシアちゃんは周りが暗くなるまで話した。

「あーもうこんな時間！」

ペルシアちゃんが公園に立っている時計を見て言う。

「本当だ……じゃあ今日はこれでお別れだね」

「そうだね……ねえ」

「うん？」

「明日もここに来る？」

「来るよ！ていうか僕は毎日来てるよ」

「本当！じゃあ明日もこうやってお話ししない？」

「うん！」

「やった！じゃあまた明日ねエル君！」

「うんまた明日！」

公園の出口に向かうペルシアちゃんを最後まで見届けた後俺も家に向かって歩き始める。

(よし！まずは第一歩！とりあえずお父さんとお母さんには報告しておこう)

――
はい、どうもヨーグリーです。

まずはお気に入り登録した方ありがとうございます。

今回で試作品の二つ目です。今のところではあと二話続く予定です。そして次回で

原作前が終わります。

多分読んでいて『ここ原作と設定が違うぞ?』ていうところがあるかもしれないですが自分はまだ原作を読んでないので違うところがあると思います。一応wikiの方で世界観を調べましたがあまり詳しくは見えてません。それなら原作を早く読めよ。っと思う方もいると思いますが最近何かと忙しくて読めないんですよね。それに前回言っただんですが今書いている作品が後半に入ったら本格的に活動していくつもりです。それまでにはきちんと原作を読んでもおきます。

それじゃあもう書くことが無いので今回はここまで、また次回!

今度は高等部で.....

俺がペルちゃんと知り合つて5カ月が経つたある日今日も俺らはいつもの公園で話していた。

「それでね犬塚が：：どうしたのさつきから僕の顔ばかり見て」

「い、いやなんでもないよ！それでなんだっけ？犬塚？つて子が体育の時間で転んだんだっけ？」

「いや、そんな話してないよ？それに顔も赤いけど大丈夫？熱でもあるの？」

熱があるか確認するためにペルちゃんの前髪を上げておでこに手を当てる。少し熱いな。

「にや、にやんでもないから！」

「でもさつき触つたら少し熱かったよ？今日はもう終わりにする？」

「それはだめ！」

いきなりペルちゃんが大声を出した。

「ま、まあペルちゃんがいいならそれでいいけどあんまり無理しちやだめだからね？」

「うんわかつてる」

「それじゃあさっきの続きでも… あー何話してたか忘れちゃった」

「私も忘れちゃった」

「ま、いつか今日はもうこのまま時間までボーっとしてようか」

「うん」

ベンチに深く腰を掛けて空を見る。するとペルちゃんが手を握ってきた。

「えつとお… ペルちゃん？」

「だめ…？」

上目使いで聞いてくるペルちゃん。

（ぐはっ！これはまずいシルさん以上の可愛さだ！あの人は狙ってやってるけどこの子は狙ってやってるわけじゃないからタチが悪いぞ。それにまだこの子がまだ5歳でこの世界では同い年だが俺は精神年齢で言うときく30超えているおっさんだからよかったわ。もしこれが高等部のペルちゃんだったら一発で落ちたわ）

「もちろんいいよ！」

「やった！」

そう言いながら小さくガッツポーズをする。うん可愛い…。あれ？俺落ちてね？

それから何も話をしないで手だけを繋ぎ時間だけが進む。俺はこんな時間がとても

心地よいと感じてしまう。もしこんな時間が続くなら俺はきつとどんな手を使ってもこの子を守るだろう。

「あ、もうこんな時間」

「本当だ」

「時間が経つのはやいなあ……」

「どうせ明日もここに来るんだしよくない？」

「よくない！エル君は女心っていう物を何もわかってない！」

「そ、そうすか」

「そうだよ！今日は今日！明日は明日って言葉があるでしょ！それだよ！」

「あ、はい」

「むう！絶対わかってない！……もういいもん今日は時間がないからまた今度教えてあげる」

「お、お手柔らかにお願いします……」

「それじゃあ……また明日」

「うんまた明日」

ペルちゃんと公園の入り口まで一緒に行きお互い挨拶をして俺はペルちゃんが遠く

なるまで見届ける。

「ただいまー」

公園から帰ってきていつもみたいに最初に部屋に行つて部屋着に着替えリビングに向かう。そしてリビングに行くとお父さんとお母さんが真剣な顔をして話していた。

「どうしたのお父さん？」

「帰つたか」

「うん今さつき。それでどうしたのなんか真剣な顔をしてるけど」

「エル、慌てず聞いてくれ」

「うん」

「俺とお母さんは親族以外には結婚したことを言っていないのは知ってるよな？」

「うん」

「実はな東和国とウエスト公国のとある人物から目を付けられているという話を俺の親父から聞いてなそれで一週間後にフランスの方に親父の友人がいるからその人に匿ってもらふことになった」

「本当に言ってる?」

「ああ、すまない俺が不甲斐ないばかりに」

「期間はどれくらい?」

「とりあえず国の目のある程度避けられるまでだな。でも安心してくれダリア学園の高等部までには間に合うように話をしておく」

「わかった」

「本当にすまない」

「エル、ペルシアちゃんにはきちんと言っておくのよ?」

「うん... 悪いけど色々することがあるから部屋に戻るね」

部屋に戻りこの一週間ペルちゃんに出来ることを考えた。

(とりあえずどうするか... お父さんはダリア学園の高等部には間に合うように話を付けてくれるらしいからそれについては心配はないだろう。俺の夢は高等部から本格的に始動するからな。けどペルちゃんにはどうしようかな... うーんだめだ! なにも思い浮かばない! とりあえず今日からフランスに行つた時のことを考えよう。フランス語は現実世界の方で興味があつて勉強したから話せるし)

そしてついに一週間が経ちフランスに行く前日になった。

「ペルちゃん」

「なに？」

「今日は大事な話があるんだ」

「大事な話？」

「うん………実は明日僕フランスに行くことになった」

「え………？」

「ごめんね本当はもっと早く言うべきだったんだけど、どうしても言い出せなくて」

「なんで？」

「お父さんの都合で………」

「やだ！私エル君と離れたくない！」

そう言つて俺の手を掴む。

「俺もペルちゃんと離れたくないけどだめなんだ」

「どうして！」

「どうしてもなんだ」

「なら私も一緒に行く！」

「無理だよ」

「そんなの言ってみなくちゃわからないよ！」

「無理なものは無理なんだよ…… わかつて」

「やだ！ わかりたくない！一緒に！私はエル君と……一緒に…… いたい」

さつきよりも手に入れた俺の手を握るペルちゃん。それに対して俺も握り返す。

「聞いてペルちゃん」

「…… なに？」

「僕ねダリア学園に入ろうと思ってたんだ。初等部と中等部はフランスの学校になると思うんだ。けど高等部までには帰ってくると思う。それで戻ってきたらダリア学園に編入するつもりだよ」

「それじゃあ……」

「うんもしペルちゃんがダリア学園に行くなら高等部になるけどまた会えるよ」

「行く！ 私ダリア学園に行く！」

「じゃあ約束ね？」

「うん約束！」

そして俺たちは指切りをしてお互いに手を繋ぎいつもみたいにベンチに座る。けどその距離はどこかいつもより近い。

—————

「あ、もう時間だ」

「本当だ」

「うう…… やっぱり嫌だよ……」

「もうまた泣くんだからどうせ高等部で会えるでしょ？」

「そうだけどそうじゃない！ やっぱりエル君は女心をわかってない！」

「確かにそうかも」

「そうだよ！」

「そしたらperlちゃんにこれあげる！」

俺は今日持ってきた手提げ袋から紙袋を出しその中身を出す。

「ヘアピン？」

「うんperlちゃんはいつも頭にリボン付けてるでしょ？ それでリボンか髪にでもつけてもらえればいいなって思って」

俺が渡したのは淡い黄色みを帯びた白色の花びらがついたヘアピンだった。

「すごい！ 綺麗！」

「でしょ？ perlちゃんの髪の色とも合うと思ったんだ！」

「ありがとう！ エル君！」

「どういたしまして！」

「ちなみにこれはなんて名前の花なの？」

「それはねヒマワリだよ」

「え、でも私が知ってるヒマワリは黄色じゃ……」

「確かにヒマワリって言ったら黄色だけどそのヒマワリはイタリアンホワイトというヒマワリなんだよ」

「へえ」

「あとそれが今の僕の気持ちだよ！」

「エル君の今の気持ち？」

「うん！」

「えっと……うーん？」

「まあ普通はわからないよね。家に帰ったらお母さんに花言葉を聞いてみるか自分で調べてみてよ」

「うん……」

「…… それじゃあこれ以上だと暗くなっちゃうし」

「そうだね……」

「じゃあまたダリア学園の高等部で」

「うん！」

そう言ってお互いに振り向き家へと帰る。

(待つてね、ペルちゃんいつかきつとお父さんとお母さんの夢を叶られるぐらい強くなつて君を守るぐらいになるから……！)

—————

はい、どうもヨーグリーです。

というわけで今回で原作前終了です。

今更ですがペルシアの口調は自分の予想です。

今回も書くことが無いのでここまで。それではまた次回！

再開

フランスのとある空港。そこで俺はお世話になった人たちと別れの挨拶をしていた。

「9年間本当にお世話になりました！フランスシスさん」

「こちらこそありがとね君と過ごした9年間はとても楽しかったよ。でもよかったのかい？こつちでお父さんたちといった方が安全なのに」

「はい、自分にはどうしてもやり遂げなくてはいけない夢があるんです。それに約束もしましたしね」

今話している人はお父さんのお父さん、まあ俺のおじいちゃんだね。そのおじいちゃんとは昔から仲が良くて今回の事で俺たちを匿ってくれた人だ。

「……そうか。なら私からは何も言わないよ。……だけど何かあつたらまた連絡してくれ私たちはいつでもエル君の味方だからな」

「ありがとございませす。……さてと」

フランスシスさんと会話を終えるとその後ろにいた親友のセドリックや他のクラスメイト達の方に顔を向ける。

「みんなも今までありがとね」

「おう！またいつでも遊びに来いよ！その時には何か手土産も頼むな！」

「もちろんセドリックには大好物のトマトをたくさん持ってきてやるよ」

「好きじゃねーよ！むしろ大っ嫌いだ！」

「まあまあセドリック落ち着いてトマトは甘くておいしい食べ物だよ？」

「ふん！あれのなにか甘いんだよ」

「まあこんなセドリックは置いておいて」

「おい！」

「本当にありがとう！セドリックとは9年間ずっと一緒にいて学校もクラスも全部一緒に切っても切れない何かがあったし、他に辛いことや楽しかったこと色々あったけど今こうしてここに俺が居るのはみんながいたからなんだ。だからしつこいようだけど何回でも言わせてほしい…… 本当にありがとう！すごく楽しかった！」

「何くさい事言ってるんだよ！お礼なら俺らも数えきれないほどあるわ。けど全部含めてみんなを代表して一言」

途中で言葉を切って後ろにいるクラスメイトに顔を向けて一度うなずく。

「俺らの方こそ本当にありがとう！お前と一緒に過ごした今日までの日々は最高に楽しかったぜ！向こうでも元気にやれよ！」

「おう！」

セドリツクとみんなの思いも込められた言葉を受け取りそれに対して俺も全力で答える。

「エル」

「エル……」

「お父さん……お母さん……」

「今日まで本当によく頑張ったな流石俺らの息子だ」

「なにかあつたらすぐこつちに戻ってきなさい。あなたがいつでも戻ってきてもいいように準備してるからね」

「うんありがとね二人とも」

そう言つて二人に近づき片方ずつ手を握り言う。

「二人の夢は必ず俺が叶えて見せる……だから二人はここで待つてて」

「ああ」

「ええ」

「それじゃあ行つてきます」

「……行つてらっしゃい！……」

（はあ、会おうと思えばいつでも会えるのにもこういう別れは見送りされる嬉しさと別れたくないという悲しきで胸がいっぱいになるな。それにあの子は元気だろうか……）

もしこれで覚えられてなかったら悲しすぎて立ち直れないかもしれない。なんか心配になつてきたな。(…)

———
ペルシア side

最近同じような夢を見る。それは私が幼いころの記憶。

『ペルちゃん今日はどうする?』

『今日はなんかボーっとしてたい気分かな』

『わかった!』

たったそれだけの言葉だけを交わし二人で公園のベンチに座る。そしていつも私の方から手を繋ぐ。最初の頃はお互い恥ずかしながらも繋いでいたが回数が増えていくたびに慣れていって手を繋ぐのが当たり前になっていった。その時の私は何も思わなかったが今思うと少し残念な気分になる慣れつていうのは時に残酷ね。だけどたまに彼から手を繋いでくれることもあった。もちろんその時はうれしくてつい小さくガッツポーズをしたのをよく覚えてる。

だけど昨日と今日の夢は…

『実は僕明日フランスに行くことになつた』

『やだ！私はエル君と離れたくない！』

いきなり言われた彼からの言葉。私はそれを受け止められず離れたくないとわがまを言ってしまう。だってそれは仕方のないことだと思う。その時から私は彼に恋をしていたのだから。彼はウエスト公国と東和国など関係なく話せる唯一の友達として時折見せるあの笑顔が私は堪らなく好きだった。そんな人が突然親の都合で遠く離れた国に行ってしまう私の前から大切な人がいなくなってしまうとしても私は行かないでほしかった、だけど私はただ行かないでと言う事しか出来なかったそんな自分が立ってしまったて泣いてしまった。だが彼はそんな私を見てこう言った。

『僕ねダリア学園に入ろうと思ってたんだ。初等部と中等部はフランスの学校になると思う。けど高等部までには帰ってくると思う。それで戻ってきたらダリア学園に編入するつもりだよ』

彼はそう言ったその時の私はよほど彼から離れたくなかったらしく『戻ってきたらダリア学園に編入するつもりだよ』って言葉を聞いて勢いで私もダリア学園に行くと言った。まあその時から学校はダリア学園に行く決めていたから問題はなかったけどね。そして二人でいつかまたダリア学園の高等部で会うという約束をした。

なぜ最近あの日の夢を見続けるのかはいまだわからない。けどきつと私が彼の事をそれぐらい好きだという事なのかもしれない。

「ペルシア様！」

突然ドアの前から女の子の声が聞こえる。

「今すぐ外の方に！黒犬の野郎どもが！」

「わかつたわすぐ行く！」

「はい！」

ドアの前から話しかけてくる女の子に言つて準備をする。そして今日も彼からもらつたイタリアンホワイトのヒマワリの花びらがついてるヘアピンを着ける。

このヘアピンをもらつた時に彼は『僕の今の気持ちだよ！』と言つてきた。それに対して私は意味が分からず首を傾げる。すると彼は親にこれの花言葉を聞くか自分で調べてみてを言つた。その夜私はお母様にどういう意味か聞いてみた、だけどお母様にもどういふ意味が分からなかつた。それなら調べてもいいが、なぜだか調べることだけはしたくなかつた。なら彼に会つた時にでも聞こう。それまでこのヘアピンは大事に使うと決めた。

—————

Er side

(あーやばい！やらかした！時差ぼけの所為で寝坊した！どうするか考える神崎工ル……… あーこれなら！)

周囲に人がいないか確認をする。

(よし周囲に人はいない！やるなら今だ！)

周囲に人がいないかを確認したら足に思いつきり力を入れて飛ぶ。

知らない人の家の屋根を足場にしてまた飛ぶそれを何度か繰り返していくうちにダリア学園が見えてくる。

(見えてきた！よしこの距離なら本気で飛ばせば一回で行けるはず)

そして赤い屋根の家の上に着地をして軽く準備運動をする。

(よし！行くぞ！)

ダンッ！

さっきの倍の力で飛ぶ……が少し力を入れすぎたため思ったより飛んでしまった。

そしてダリア学園まで飛んできたが力加減をミスったせいで校門よりも先の校内と校門の真ん中の通路あたりで徐々に高度が落ちていって……

「うわああああ！どいてどいてええええええええ！」

派手に落ちてしまう。

—————

ペルシア side

エルが落ちてくる少し前。

「ウエストのクソ貴族が！」

「東和国の野蛮人め！」

今日も東和国の生徒との戦闘だった。

「犬塚！手を貸そうか!？」

「いや・・・ペルシアは俺が倒す！手え出さな！」

そう今の私は白猫のリーダーになるくらい強い。もし彼がこんな私を見たらなんていうのだろうか？初めて彼と出会った日私は彼の夢を聞かされた。その夢を聞いて私はその手伝いをすると言った。だが今はこうやってウエスト公国と東和国とか言いながら黒犬の生徒と争っているのだ。彼が見ればきっと失望されるだろう。そう考えるだけで胸が痛む。

「ペルシア様ここはお任せください」

「スコット・・・」

「命をかけてあなたをお守りする・・・僕にできるのはそれくらいですから」

そういつて私の両手を包むように握ってくるスコット。

こう言ってくれるのはうれしいのだが私はそれを彼に言われたらどれくらいうれしくなるだろうと考える。けど彼はまだここにはいない。

そう思っていると突然上から声が聞こえる。

「うわああああ!どいてどいてええええええええええええ!」

「え?」

エル side

ズドン!

「いったあ!..: くない!?!」

「う...: とう...:」

突然下から声が聞こえたため下に向くと白い服を着た人がいた。

「うわあ!すみません!つい力加減を間違えてしまつて!」

下敷きになってた人に謝る。そして周りを見ると全員が俺をじつと見ていた。

「あ、あれ?もしかして俺お邪魔?」

「ああすつげえ邪魔」

今度は後ろから声が聞こえたから振り向くと黒い制服、自分と同じ制服を着た目つき
の悪い生徒がいた。

「ごめんね?今どこか?...: ら...: って!もしかしてロミオ!?!」

「はあ?なんでお前俺の名前知ってるんだ?俺はお前なんかしらねえけど」

「もしかして忘れた？ほら！小さい頃家が近くてよく遊んだじゃん！」

「小さい頃？家が近くてよく遊んだ……？あ！」

「思いついた？」

「ああ！お前よく遊んでた神崎エルだろ！」

「うん！久しぶりだねロミオ！」

「おう！あの時はいきなりフランスに行くって言ったからびっくりしたぜ」

そういつて俺の前にごぶしを出すロミオ。

「お？久しぶりにやるか」

ロミオのごぶしに俺のごぶしを軽く当てる。

これは俺とベルがよくやっていことだ。それをロミオに教えたのだ。

すると突然ロミオの後ろにいるサイドテールにしている黒髪の女の子が犬塚に話しかける。

「犬塚こいつだれだ？」

「こいつは俺が小さかった頃に家が近くてなよく遊んでた幼馴染の神崎エルだ」

「Ravi de vous rencontrer. 初めましてロミオの幼馴染の神崎エルです！今日からこのダリア学園に編入することになりました！ちなみにフランスからの帰国子女です」

ロミオの隣に移動してきたサイドテールの女の子に自己紹介をしてフランスからの帰国子女だと伝えると、ええええええ!?!と驚いていた。

すると今度は俺のすぐ後ろで泣いている声が聞こえた。

「本当に…… 本当に帰って…… 来たんだ……」

後ろを向くと両手で口元を押えて泣いている金髪の女の子が立っていた。

とても綺麗でまぶしい金色の髪の上に少し大きめの黒いリボンを着けてその反対側の髪には俺が幼いころにとある女の子にあげたイタリアンホワイトのヒマワリの花びらが付いたヘアピンを着けていた。

そんな目の前にいる女の子が俺がこれまで三回別の世界で生きてきて心から本気で愛した人…… ジュリエット・ペルシアだった。

—————

はい、どうもヨーグリーです。

初めにお気に入り登録して下さった方ありがとうございます！

今回から原作開始です。

一応自分の中でこれで試作品は終わりの予定でしたが原作前で二話使っちゃたのであと一話続きます。

それでは今回はここまで！また次回！

強さとは...

「ペ、ペルちゃん...?」

後ろを振り向くと泣いている子は俺が幼いころから心から愛したペルちゃんだった。

泣いている彼女に近づこうと一歩前に出るとそのまま後ろを振り向き白猫の校舎に走って行ってしまった。

「ペ、ペルシア様!」

俺が落ちるときに下敷きにしてしまった人がいつの間にか復活しており逃げるように走っていったペルちゃんを追いかける。

「ペルちゃん...」

「コラー!校内での喧嘩は禁止と言ってるだろうが!」

突然校舎の方から教師が数名こちらに走ってくる。

(仕方ないここは俺がおさめるか)

「おはようございます先生方」

「ん?君は...」

「自分は今日からこのダリア学園に編入することになった神崎エルです!今さつき先生

が喧嘩と言いましたがそんなことしてませんよ?」

「なに?」

「ただ自分がここに集まってる生徒全員の前に派手な登場をしましてそのままと自分の自己紹介をしていたんです」

「そうなのか」

俺の近くにいたロミオとサイドテールの女の子に確認をする。

その時に俺はロミオにアイコンタクトで話を合わせてくれって意味を込める。ロミオもそれに軽くうなずく。

「そうなんすよ!いきなりこいつが俺らの目の前に上から落ちてきてそのままこいつの自己紹介をすることになったんすよ!な?蓮季」

「そ、そうだゾ!」

「どうやら本当らしいな。よし!それなら早く自分たちの教室に戻れ!」

その言葉に黒犬、白猫の生徒みんなが戻って行く。

「あ、そうだ神崎はこの後職員室に来てくれ」

「分かりました」

「とりあえずエルは俺に着いてきてくれ教室まで案内するぞ」

「わかった」

ロミオに教室に案内される途中サイドテールの女の子、たしか蓮季？が俺に話しかけてきた。

「なあ神崎はいつから犬塚と仲がよかったんだ？初等部と中等部では見たことないけど」

「ロミオとは初等部より前から家が近所つてことで一緒に遊んでたんだ。んでダリア学園の初等部に入学する前に親の都合でフランスに行くことになったんだ」

「じゃあフランス語話せるのか!？」

「もちろん話せるよ」

「すごいな！」

「ほらついたぞ」

どうやら蓮季と話してる間に教室に着いたらしい。

「今度フランス語聞かせてくれな！」

「いいよ。んじゃあ俺は職員室に行ってくる」

ペルシア side

「ハアアア！」

カアン！

「ま、参った！」

「ありがとうございますました！」

私たち白猫は今剣術の特訓中だった。

「お疲れ様です！」

「サンキュ」

「男顔負けの強さですね！」

「いえまだまだよ」

「そんな！そんなに強いのに！」

「私の目指す強さっていうのは世界すら変えちゃうようなそういう強さなの。」

「世界？」

そう私は強くない。昔彼と離れてから一人でも彼の夢の手伝いをしようとしたことがあった。：：けど私一人では何もできなかった。結局は口だけ。：：そして今朝彼は突如私たちの前に現れた。昔とは違って身長も伸びていてたくましくもなっていた。けど雰囲気はあまり昔とは変わってはいなかった。そんな彼を見たときに私はすごく嬉しくなり今すぐにも飛びつきたかったがさすがに黒犬と白猫全員が見てる前ではやる勇気はない。それと同時に怖かった。：：もし私の事を忘れていたら、今の私を見てどう思うのか、どうしても考えてしまう。そして私はそんな二つの感情のせいで泣いてし

まい彼から逃げるように校舎に戻ってしまった。

「そういえば今朝の彼は何者だったのでしょうか？いきなり僕の上に…上？…：…
そうだ！あいついきなり僕の上に落ちてきて僕を下敷きにして！今度会ったら許さな
いぞ！」

スコットが彼にされたことに勝手に怒っているが気になるのはそこじゃない。ス
コットが言った通り彼はいきなり上から落ちてきたのだ。普通はありえないことな
のだが…

「ちゃんと歩け！」

突然外から誰かが叫ぶ声がある

「行ってみましょう」

「はい」

外に出てみると白猫の生徒が初等部の子を三人ほど連れてきた。

「どうしたの？」

「ああ黒犬のガキどもがね白猫の寮に落書きしてたんでちよくと痛い目に遭わせてやろ
うと思つてさ」

「どうしてそんなことをしたの？」

「白猫の奴に黒犬は弱いってバカにされたから！だからやり返した！文句あるか！」

私が聞くと黒犬の初等部の子が怒りながら言った。
すると子供を連れてきた生徒が言つてた子を殴ろうと腕を振る。

「何してんだ」

だけどその拳は当たることはなく横から来た生徒によつて腕を掴まれる。

—————

Er l s i d e

ロミオに教室を案内してもらつてから職員室に行つて担任の先生に色々説明してもらつて今ようやく終わった。

(教室に戻るのもいいけど少し散歩していくか)

校舎を出て適当に歩いているとどこかから大きな声が聞こえた。

(ん？なんかあっちの方から声が聞こえるぞ)

声が聞こえた方まで行くと黒犬の初等部の子が白猫の生徒に連れていかれていた。

そして大きな建物の前まで連れていかれてドアの前に行くとツインテールに髪を結んでいるペルちゃんが出てきた。

(ぐはっ！…な、なんていう破壊力だ…あれだけで国一つを滅ぼせる可愛さじゃねーか。しゃ、写真撮つておこう)

俺はポケットから自分のスマホを取り出し無音カメラのアプリを起動してペルちゃ

んを写真に撮る。

(やった!まさか一日目からこんなペルちゃんの写真が撮れるなんて!.....あれ?
これ盗撮じゃないよね?...ま、いつか!)

いや良くない。読者の皆さんは決して盗撮なんてしないでくださいね!盗撮は犯罪
です。byヨーグリー

フォルダーに保存したペルちゃんの写真に見とれていると突然初等部の子の声が聞
こえた。

「白猫の奴に黒犬は弱いってバカにされたから!だからやり返した!文句あるか!」
初等部の子が言うと同前にいた白猫の男子生徒が殴ろうとしていた。

(まずい...!)

俺は咄嗟に隠れていた場所から飛び出し『ダンまち』から引き継いだファルナの俊敏
をフルで使い殴ろうとしている白猫の生徒の腕を掴む。

「何してんだ」

「テ、テメエ...今朝の黒犬!いきなりどこから出てきた!」

「そんなことはどうでもいい早く答えろ」

「ふん!誰がお前みたいなの黒犬に答えるかよ!」

「そうか」

白猫の生徒が答えてくれなさそうだったから俺は掴んでいる腕を離してペルちゃんの方を向く。

「どうも今朝ぶりです。ね、白猫のリーダーのジュリエット・ペルシアさん」

俺はペルちゃんを知り合いだとばれないように他人のふりをする。

「え、ええ」

「それでこれは何があったか説明してもらえませんか？」

「ペルシア様から離れろ！」

横から朝俺が下敷きにしてしまった人が殴りかかろうとする。

「よしなさい！」

今度はペルちゃんが大きい声を出して止める。ペルちゃんかつこいいい……！

（いかんいかんあまりのかつこよきに見惚れちゃうところだった）

「いい話をあげてあげる」

それからペルちゃんに何があったか説明してもらった。

「どうやら黒犬の初等部の子が白猫の寮に落書きをしてたところを見つかりここまで連れていかれて今に至るらしい。」

「わかりました。じゃあ少しまっててくれませんか？」

「え、ええ」

「さてと...」

俺はペルちゃんの返事を聞いて後ろにいる初等部の子供たち方を向いて同じ目線になるように座り込む。

「君たちは白猫の人に黒犬は弱いって言われて悔しいか？」

「あ、当たり前だろ！」

一番前にいる子が答える。

「じゃあさ白猫の寮に落書きして満足か？」

「.....」

俺が聞くと下を向き黙り込む。

「そうだよな満足しないよな?... でもな?もしそれで満足してたら俺は君たちの事を怒っていたかもしれないぞ?」

「え?」

俺がなに言ってるのかわからず首を傾げる。

「俺はなここじゃない別の国で暮らしてたんだ。それでなその国は当たり前のようにお互いが陰で相手にばれないようにコソコソと悪口を言ったり嫌がらせをしてたんだ。それでその人たちはやり切ったかのように満足げな顔をするんだ。けどなそういう奴らに限って一人では何も出来ない弱者なんだ。しかも何か問題が起きたら真っ先に他

の人の所為にして自分が悪いことを認めないんだ。どうだすごく汚い人たちだろ？」

「うん…。」

「けど君たちはまだそうじゃない。今からでも強くなれる」

「本当！」

「ああ」

「あ、でもどうやって強くなれるんだろう」

「強くなるって言っても三つあるんだ」

「三つ？」

「ああ、まず一つ目が心だ」

「心？」

「君たちはさ白猫の人たちに黒犬は弱いって言われて悔しかったんだろ？けどなそういうことは言わせておけばいいんだ。さっきも言ったがそういう奴らに限って何もできない弱者なんだ。けどだからって相手にバレずに嫌がらせで仕返ししても弱者だ」

「ならどうやって…。」

「最初はつらいけど我慢するんだ」

「なんで？」

「君たちは黒犬の悪口を言われてどう思ったんだっけ？」

「悔しかった!」

「だろ? だからこそ我慢するんだ。今回の事で君たちはその悔しい気持ちを味わった。この世の中には何もせずになれ強くなる人なんて一人もないんだ。もしそれで強いつて言うならその強さは偽物だ。本当の強さっていうのは君たちが味わった悔しい気持ちや辛い気持ち、こういう気持ちを知っている人が強いんだ」

「ぼ、僕はそんな悔しい気持ちや辛い気持ちを知っても強いとは思わない!」

「それは君がそういう経験をしてないからだ。俺はねそういう経験をたくさんしてきた。そしてそういう気持ちを持つてる人は相手の気持ちを思いやれる優しい人になるんだ」

「お兄ちゃんもそうなの?」

「そうだぞ。俺は君たちよりずっとそういう経験をしてきた。だから俺は君たちの悔しいって気持ちがよくわかる。でも最初は我慢するのが大変でどうしてもやり返したくもなる! ! ! けど我慢すればおのずと心は強くなり相手の気持ちを知りことも出来て思いやる心も出来て最終的にはとてもやさしい強い人になれる」

俺が言い終わると初等部の子たちは目をキラキラさせながら俺を見てくる。

「なりたい! まだ難しいことはわからないけどお兄ちゃんみたいになりたい!」

「僕も!」

「私も！」

一番前の子が言うその後ろにいた子も前に来て言う。

「そうかそうか今の話を聞いてそう思ったならきつとなれるさ！でも後の二つはまた今度な？」

「うん！」

「よし強くなるための一歩目だ！君たちのしたことは悪いことなのはわかるよね？」

「うん！」

「じゃあ悪いことしたらまずは何をするんだ？」

「あやまる！」

「うんそうだ。じゃあそこに金髪のお姉ちゃんがいるだろう？あの人は白猫のリーダーだ。だからその人にちゃんと謝ってきなさい」

「わかった！」

返事をするそのままペルちゃんの所に行く。

「白猫の寮に落書きをしてごめんなさい！」

「ごめんなさい！」

「私からも謝るわごめんなさい。うちの生徒が」

「うん！」

お互いに謝ると子供たちは俺のところに戻ってくる。

「ちゃんとあやまれたよ！」

「よくできました！」

そう言つて三人の頭を順番に撫でる。

「わーい！ほめられた！」

「それじゃあ後はお兄ちゃんに任せて君たちはもう行きな」

「うん！それじゃあお兄ちゃんまたねー！」

「おうまたな」

手を振られたため俺も振り返す。

「さてと」

立ち上がり後ろにいる白猫の生徒の方に向きを変える。

「俺からも謝るすまなかつた」

頭を下げて謝る。

「も、もういいわよ謝らなくても」

「ありがとう。じゃあ仲直りの証として握手しない？」

ペルちゃんの前まで移動して右手を出す。

「もちろんよ」

ペルちゃんも少し前に出て右手を出して俺の手を握る。そして俺はもう少しペルちゃんに近づいて言う。

「ただいま」

「うんおかえり」

お互い挨拶をして離れて手を離す。するとペルちゃんは少し残念そうに「あ……」と言う。

「それじゃ俺はこれで失礼します」

去ろうと後ろを向くと視界の端にロミオが入った。

「あれロミオ？」

—————

犬塚 side

（すげえ勢いで出ちまったけどエルのやつたくましくなつたな。それにエルが話してる時にペルシアがエルを見てる時のあんな顔今まで見たことがねえ。しかもすこし顔が赤かったし……）

「あれロミオ？」

（やべえ！そういうえば飛び出してそのままだった！）

「何しに來たの犬塚！」

「ま、待て別に喧嘩しに来たわけじゃねえ！」

「じゃあなんの用なの!？」

「それはその... 告... 告...」

「こく... 何よ？」

「告訴だ! 告訴してやる!」

「はあ!？」

(ちくしよ! やつば言えねえ!)

そのまま俺は逃げるように戻って行ってしまおう。

—————

エル side

(ロミオのやつ一体なにがしたかったんだ? まあいつか)

そして俺は黒犬の教室に戻って行く。

—————

はい、どうもヨーグリーです。

今回でこの試作品シリーズは終わりですが、ここで重大発表があります。

来週から『エルとジュリエットの寄宿学校』の本格的に活動します!

理由はただ単純に書いてて楽しくてもっと書きたいからと思っただからです。

よかったらこれからもよろしくお願いします！
では今回はここまで！また次回！

見てしまった告白と俺の心模様

教室に戻るとすでにロミオが戻っていた。

「ロミオさつきはどうしたんだ？」

「いや、なんでもねえよ……」

「そうか。でも何かあったらいつでも言ってくれよ？相談に乗るからさ」

「おう」

ロミオと会話をしていると蓮季がこっちに来了。

「二人はどこ行つてたんだ？」

「久しぶりに会つたから二人で話そうつてなつて校内を散歩してたんだよな？ロミオ」

「ああ」

「そうなのか！」

それから俺は普通に授業を受けていた。

(どこの世界に行つても数学つてあまり変わらないんだな……)

そして一日の授業を全部終えて俺は自分の部屋に戻り荷造りをしていた。

(いやー、まさか二人部屋で一人になるとはな……しかも一人だから超広い)

それから時間が経ち気づいたら外は夜になっていた。

(もうこんな時間か。そういえば今日は何曜日だ?)

壁に掛かっているカレンダーを見る。

(水曜日か。よしギター持って適当に静かな場所でも探すか)

俺は部屋の隅に置いてあるアコースティックギターをケースにしまい背中に乗せて静かに部屋をでる。

寮を出て少し歩き噴水広場に着く。

(お?ここなら静かでもいいんじゃない?)

背負っていたギターをベンチの上に置いて座る。

(はあ、今日は一日目から大変だったな。でも今日はいい物も撮れたしいいか。あれ?確かケータイの持ち込みって駄目だったような。まあいつか)

ケースからギターを取り出し座りなおしてギターが弾きやすい体制になる。そしてギターを弾く。

『~~~~~♪』

俺がこうしてギターを弾き始めたのは俺ら家族を匿ってくれたフランシスさんが弾いてるところを見てかつこよくて俺も弾きたいと言ってお父さんに買ってもらったの

が理由だった。

そしてたくさん練習をして3年が経った頃に俺は月、水、金、日曜日ごとに一人静かになれるところを探しては弾いていた。今となつては習慣になつてしまった。

—————

だいぶ時間が経ち六曲目が弾き終わり部屋に戻る準備をする。すると白猫側の方から誰かが歩いてくる音が聞こえてくる。俺はまずいを思い急いで片づける。そして一応誰が来たのかを確認してみるとベルちゃんだった。

（あれ？こんな時間にどうしたんだろう？しかも両手には剣持つてるし。あれ本物じゃないよね？一応隠れて見るか）

俺はさつきまで座っていたベンチの下に隠れる。

（ここはばれないよね？角度的には大丈夫だけど…）

バレるか心配していると今度は黒犬側から誰かが歩いてきた。

「よく来たわね…：… まずは一いつ聞きたいさつきあなたは私を襲ったの？それとも助けてくれたの？」

（襲った？助けた？話が読めない。それより誰と話してるんだ？）

黒犬側から来た人物がまだわからなかったため少し顔を出して見てみるとロミオが立っていた。

「襲つたのだとしたらこの剣で決闘を申し込むわ。でも助けたのだとしたらそれはなぜ？あなたにとつて私は敵でしょう？…もし助けた理由が単なる同情なら…それは私にとつては襲われるのと同じくらい辛い…！」

「え…。」

「誰にも…：…特に犬塚には同情されたくないの！勝手だけどライバルだと思つてるから…：…！あなたに弱いと思われることだけは耐えられない！」

「そんなこと思つてねえよ！」

「ウソよ！いつも攻撃は手加減するし！私を喧嘩から遠ざけようとするじゃない…：…それつてバカにしてるからでしょ…：…？」

「ペルシア…：…わかつた本気を見てやる！俺と決闘しろ！」

「ありがとう。私の気持ちを汲んでくれて。それじゃああなたの本気見せて頂戴！」

「ああ」

（ペルちゃんと言ミオどつちが勝つんだ？ていうか口ミオさつきからペルちゃんを泣かせすぎじゃね？後でお仕置きしておかないと…：…）

「はあああああ！」

「好きだ！付き合つてくれ！」

「はあああああああ！」

最後まで戦いを見届けるつもりだったがロミオのいきなりすぎる告白で勢いよくベ
ンチの下から飛び出してしまった。

「エル!？」

「エル君!？」

俺がいきなり大声を上げて飛び出したせいで二人が俺を見る。

「エル君だと!？」

ペルちゃんが俺を昔からの呼び方で呼んでしまつてそれに対してロミオが言い返す。

「あ…。」

するとペルちゃんは両手で口を抑えてやってしまつたつていう顔をする。そして俺
も勢いで飛び出したもののどうしたらいいか分からず固まつてしまう。

「全部聞いてたのか?」

俺がどうしたらいいか分からずにいるとロミオが俺に聞いてくる。

「う、うん。ていうか俺二人が来るだいたい前からここにいたよ」

(ていうかさつきから胸のあたりがモヤモヤするんだけど、しかもイライラもす
る…。)

「まじ!？」

「うん…。ま、まあ俺はこれで失礼するよ」

そう言つて寮に戻ろうとする。

「ま、待つて！」

「どうしたの？」

「えつとお… あのお…」

「何か言いたいことでもあるの？」

モヤモヤとイライラの所為でペルちゃんに対して少し強い口調で言つてしまう。

「これは… その…」

「はあ、ロミ才悪いんだけど少しペルちゃん借りるよ」

「お、おう」

下を向いて何か言いたそうにしているペルちゃんの手と取つて噴水の反対側まで連れて行く。

ペルシア side

エル君に手を引かれて噴水の反対まで連れていかれる。

「エ、エル君…？」

「ペルちゃんが言いにくいなら俺は聞かないよ。けどねちゃんと考えて答えを出さないとだめだよ？」

「え？」

私はエル君の言葉に首を傾げる。

「人生は一度きりなんだ。まだ俺らは17歳でこれからもつと嬉しいことや悲しいことそして後悔や色んなことを経験していくと思う。けどねそういうのはその日やその場限りに感じるものなんだ一度過ぎたことはもうやり直せないんだ。だからペルちゃんはロミオに対してきちんと考えて答えを出してほしいんだ」

彼から出てくる言葉。その一言ずつがまるで彼が何回も経験したかのように思えるぐらい重みがあった。だけど私は気づいてしまった……彼の顔がとても悲しそうにしていたのをそれと同時に今すぐにも泣きそうな顔をしているのが。だから私は言えずにはいられなかった。

「どうしてエル君は今そんな悲しそうな顔してるの？」

私が聞くと彼は少し驚いたような顔をした。

「悲しいそうな顔？そんな顔をしてないよ！ほら！」

そう言っつていつものおちやらけた表情に戻る。

（そんなこと言っつて私に心配させないために……本当にエル君は……だけど私は彼のこういうところに惹かれたのよね）

「だからペルちゃんがどんな答えを出しても俺は……俺だけはいつまでも君の味方でい

るから」

(っ!... 本当に... 私はあとどれだけあなたを好きになればいいのかしら。それにすごく嬉しい... 彼にこうやって言ってもらえるなんて。なら私が出す答えは一つだけだわ!)

「お?何か決まった顔になったね」

「ええ。エル君のおかげよありがとう」

「どういたしまして。それじゃ俺は寮に戻るね」

「うん... おやすみ...」

「おやすみ」

そのまま犬塚の横を通り黒犬の寮に戻っていくエル君。

エル side

(はあ、だめだ... さつきよりもモヤモヤするしイライラもする。それにペルちゃんに悲しそうな顔してるって言われたしなあ。確かにああやってペルちゃんには言ったが話してる途中どうしてもロミオと付き合ったらって考えてしまう。考える度に胸が痛くなるし悲しくなつて泣きそうにもなつた。きつここれが嫉妬っていう物だろうか。でも答えを決めるのはペルちゃんだ... 俺が出しゃばっていいものではない。それな

「あ、ギター置いてきた……まあ明日取りに行けばいいか」
ら俺は隅から彼女を見守ろう……」

炸裂！必殺の右ストレート！

次の日今日も通路の前で黒犬と白猫が対峙していた。もちろん俺も呼ばれた。

「蓮季さんや？なぜ俺も呼ばれたのでしょうか？」

「そんなのもちろん神崎が黒犬の生徒だからだゾ」

「ええ…俺戦うの嫌いなんだけど…」

蓮季に言うのと白猫側から昨日俺が下敷きにした人、スコット？が言ってきた。

「ふん！ただ戦うのが怖いだけじゃないのか？それなら今すぐに自分の部屋に戻ってるんだな！」

「戻るなら今すぐにも戻って寝たいよ…」

「ダメだゾ！」

「ほらな？」

「なら！昨日僕を下敷きした恨みここで晴らす！」

そう言つてスコットは俺に殴りにかかる。けど俺はそれを躲す。

「ほお、なかなかやるじゃないか、ならこれならどうだ！」

さつきより動きが速くなり手数も増える。

「スコットだっけ?止めるなら今のうちだよ?」

全ての攻撃を躲しながらスコットに言う。

「それなら貴様が止めて見せるんだな!」

「言ったからね?」

俺は一度スコットと距離をとる。すると後ろからロミオが話しかけてくる。

「大丈夫かエル!」

「あ、うん大丈夫だよ」

ロミオに言っつてスコットを見る。

「えつとおスコット?でいいんだよね?」

「いい加減名前覚えたらどうだい?」

「うん、まあ善処するよ。んじゃあ次は俺の番ね?」

右足を肩幅まで広げて少し右を向く。そして右手に力を入れる。

「実はさ俺って自分が満足いく起き方をしないと寝起きが悪いんだよね。それで今朝誰かにドアを思いっきり叩かれて無理やり起こされたんだ、そのせいでめちやくちや寝起き悪いんだ。だからスコット…君でこの機嫌を直さしてもらおうわ」

そして俺はそのままスコットとの距離を詰める

「な!速すぎる…!」

「くらえ必殺スーパードット…… 右ストレート！」

スコットの顔を殴る。

「ぐはあ！」

殴られたスコットはそのまま一直線に吹っ飛ぶ。

「スコット！」

「すげええええ！」

それを見たペルちゃんはスコットの名前を叫び、ロミオも叫ぶ。

「ふう…… よしスツキリした」

「お、鬼だゾ……」

そして俺はそのまま昨日置いて行ってしまったギターを取りに行くため噴水広場に向かう。

—————

「確かここに置いたと思うんだけど……」

「探してるのはこれ？」

俺がギターを探していると後ろから声をかけられる。

「ペルちゃん……」

「これ探してるんでしょ？」

そう言うって背中に背負っている俺のギターを下して前に差し出す。

「あ、うんそうこれだよ!昨日置いて行っちゃってさーありがとね」

差し出せされたギターを受け取る。

「昨日はありがとねおかげで決心がついたわ」

「俺は何もしてないよ決めたのはperlちゃんだよ」

「うんエル君が言ってくれなきゃいつまでも決まっていなかったと思う。だから私こそありがとね」

お礼を言っただけに微笑むperlちゃん。

「それでね今日の夜空にいる?」

「夜?まあ空いてるけど」

「そう、なら昨日と同じ時間にここに来てもらっていい?」

「まあいいけど」

「ありがと、それじゃあ先に戻るわ。ちゃんと来てよ?」

「うん」

そのまま白猫の校舎に戻って行く。

—————

一度自分の部屋に戻ってギターを置いてきてから教室に戻る。

「神崎！さっきのやつ凄かったな！」

「どうしたいきなり」

戻ると蓮季が俺に近づき言ってくる。

「ああ蓮季がさっきお前がスコットを殴ったの見てからずっとこうなんだよ」

「あ、そうなんだ…」

「どうやったらあんな風に出来るんだ!？」

「えっとお… 修行？」

「しゅ、修行って一体どんな修行すりやあんな速く動けるんだよ…」

「もう死にたいと思いたくなるような感じのやつかな？」

「本当にどんな修行!？」

「まあ冗談だけど… 四割ぐらい」

つい最後の方が小声になってしまう。

「お、おい今最後の方聞いちやいけないことを聞いた気がするんだが…」

「は、蓮季もだゾ…」

「とりあえず席に座ろ？ 授業始まるよ？」

「おう。あと、エル後で話があるから昼休みいいか？」

「ああ……」

ロミオが真面目な顔で言ってきたから俺もつられて真面目な顔をしてしまう。

—————

昼休み俺とロミオは人目のつかない場所に来ていた。

「それで話って何かな?」

「ああ、昨日の事だな」

ドクンツ……

(落ち着け俺。たとえロミオとペルちゃんが付き合っても応援するんだ。昨日ペルちゃんに言っただばかりじゃないか)

「どうなった?」

俺は出来るだけ平常心を保つようにする。

「俺たち……」

「ああ」

「友達になることになった」

「………は?」

「え?」

「友達? 恋人じゃなくて?」

「ああ友達になった」

「それって振られた… てことでいいの？」

「あんまり振られたって言わないでくれ！ 思い出しただけで泣きそうになるんだ…
く、くつそおおおお！」

「な、なんかごめん」

四つん這いになり地面に向かって悔しそうに叫ぶロミオ。

「それでなんでそうなったの？」

「ああそれがな…」

—————

『待たせたわね』

『もういいのか？』

『ええ』

『そ、それじゃあ答え聞いていいか？』

一度目を瞑り深呼吸をする。

『ごめんなさい犬塚。私あなたと付き合えないわ』

『そんな…』

『あ！勘違いしないであなたが嫌いだからってわけじゃないの』

『ならどうして…』

『私他に好きな人がいるの』

『それってもしかして… エルの事か?』

『そ、そうよ』

『そつか… エルならしよすがねえか』

『何も言わないの…?』

『他の奴だった文句の一つは言ってるやりにえがエルならしよすがねえよ』

『ずいぶん彼の事を買ってるのね』

『ああ、あいつは俺にとって蓮季と同じ親友だからな。まあ初等部と中等部はあいつの親の都合でフランスに行っちゃったがな。そういうペルシアはどうなんだ? エル君って呼んでるけど』

『私も昔彼とは仲が良かったのよ。それでいつの間にか好きになってたの』

『そ、そうか…』

『それに私も彼と同じ夢があるから』

『夢…?』

『初めて彼と出会ったときに教えてくれたの。エル君のお父さんは東和国でお母さんがウエスト公国なんだって』

『まじかよ!』

『それで彼のご両親がダリア学園の高等部の時に国が違うだけで争うのは良くなつて思つてたらしいの。それで二人でこんな世界を変えようつてなつてダリア学園から変えようとしたんだつて。だけど結局それは出来なかつたの』

『そうだったのか…。それでその話がエルにどう繋がるんだ?』

『まあゆつくり聞きなさい。ご両親の話聞いた当時の彼は二人の出来なかつたことを僕がやるんだ!つて言つてたの。しかもまだ5歳よ?けどその眼には口先だけでは無い覚悟があつただから私はその夢を手伝うつて決めたの』

—————

「とまあこんな感じだな!」

「いやちよつと待つてすげー色々言いたいことがあるが…。その話のどこに友達になる要素があつた!」

「あ、その部分忘れてた」

「はあ相変わらずだなロミオは…。それにお前はそれでいいのか?」

「何がだ?」

「お前の好きな相手の好きなやつが目の前にいるのにいいのかつてことだよ」

「……………よくねえよ。しかもすげえ悔しいよ。でもエルなら仕方ねえかなつて納得は

出来るかなって……」

その言葉を聞いて俺は腹が立った。それはロミオの本心ではないからだ。よくない、悔しい、たしかにこの二つは本心だ。だけど最後は違う。こいつはエルなら仕方ないって納得したと言ったがそれはただの強がりだ。俺はロミオの事は親友だと思っただからこそ最後まで本心を言っただけ。だから俺のやることは一つしかない。

「お前舐めてんのか?」

「は?」

俺を惚けた顔で見えてきたからそのまま顔を殴る。

「いつてえな!何すんだよ!」

「ふざけんじゃねえよ!」

「なんだよいきなり……」

「何が納得できるかな……だよ!今の自分の顔見て同じ事言えるのか!」

そう言っただけ俺はポケットからスマホを出してカメラを起動させてインカメラにする。

「ちよ、お前携帯の持ち込みはきん……し……」

「わかったか?お前は納得できるって口では言ってるがそれはただの強がりだ今の自分の顔を見てわかっただろ」

「ああ……そうだよ!悔しいよ!思ったよ俺じゃなくてなんでエルなんだって!」

ど：： ペルシアがお前を好きって言ったんだなら諦めるしかねえだろ：：」

「へえ、犬塚露壬雄ってそのその程度の男だったのか」

「は？」

「俺の知ってる犬塚露壬雄は目つきは悪くて口も悪い、しかもすぐ暴力を振るう奴だ。けどな簡単には諦めるような奴じゃなかった。でもまあ今ここにいる犬塚露壬雄は俺の知ってる犬塚露壬雄とは真逆のザコのようなだしな。んじゃ俺はそんな奴には話が無
いから行くわ」

言いたいことだけを言っ
て俺は後ろを向き校舎に
戻ろうとする。

「・・・
待てよ」

「あ？まだ何かあるのか？」

ロミオに呼ばれ後ろを振り向く。するとそのまま俺の顔を殴りに来る。それを俺は受け止める。

「だれがザコだって!?! 散々好き放題言いやがって! いくらエルでも許さねえぞ! それに悔しくねえわけねえだろ! それなら俺がペルシアを振り向かせればいいだけじゃねえか!」

「ふん」

ロミオの言葉を聞いて俺は少し笑ってしまふ。

「何がおかしいんだ」

「いや、やつと俺の知っている犬塚露壬雄に戻ったなって。それにやつと本心も言ってくれたしな」

「あ…」

俺の左頬にあるロミオの右手を掴んでゆつくりとおろす。

「俺はお前の親友だ。それにこれはペルちゃんにも言ったことだが人生ていうのは一度しかないんだ。後悔しても遅いんだ。だから誰かに遠慮して生きるな…特に俺にはな?」

「ああ。ありがとなエル。おかげでスツキリした」

「それは何よりだ。それじゃあ次は俺の番な?」

「は?」

「だってお前俺のこと殴ったじゃん」

「いや、その前に一回俺の事殴らなかつたか?」

「あれはノーカン。それにさっきのは挑戦状として受け取ったからな。それに俺もペルちゃんのこと好きだから俺からも負けないって意味を込めて殴らせてもらうわ」

「ちよつと待つてくれ!話会おうぜ?今ならまだ間に合うから、な?」

「や・だ」

そして俺は朝スコットを殴った時の構えをする。

「必殺スローパー…… 右ストレート！」

そしてロミオは吹っ飛んで行った。

「やべ、力加減ミスった…… まあいつか」

タイミングと茶番そしてデコピン

学校が終わりペルちゃんとの待ち合わせの時間まであと一時間。俺は先に噴水広場に来てベンチに座ってボーっとしていた。

(久しぶりにこうやって何もせずに座ったな。こっちに来てからは何かと忙しくて出来なかったからな。それに少し眠くなつて…き…た)

—————
ペルシア side

(うう、緊張するー少し早く来すぎたかな)

白猫の寮から出て少し歩き私は噴水広場に来ていた。

(あれ？あそこに座ってるのってエル君？)

向こうのベンチに座っている人影に近づく。

(やっぱりエル君だ)

「エルく…寝てる」

近づいて声をかけようとしたがベンチに深く腰を掛けて寝息を立てていた。

(こっちに來てからあまり寝てないのかしら…？それなら…)

周りを見渡して人がいないかを確認して隣に座る。

そして彼の頭に軽く触れて起こさないように優しく自分の膝の上に置く。

(は、はずかしい……寝てるからつてさすがに膝枕するのはレベルが高かったかも……でもこうやって見ると少し可愛いかも)

今度は優しく頭を撫でる。

(やっと会えたと思つたら思わず私から逃げ出しちゃうし、しかも昨日は犬塚に告白されてるところを見られちゃった。誤解されてなければいいのだけれど……けど今日は絶対に言うんだ！あなたが好きだって！そしてこの人の隣で一緒に夢を叶えたい。だから……)

「好きよエル君」

エル side

(やばい！少し眠くなつて寝て起きたらペルちゃんに膝枕されてる！しかもめっちゃやわらけえ！どうしようこのまま寝たふりして堪能しようかな……)

俺がそんなことを考えているとペルちゃんの口が開く。

「好きよエル君」

(……俺はこの人の事が好きだ。三回別の世界で生きてきたがここまで好きに

なって愛おしいと思った人は誰一人いなかった。今日ロミオにはああ言ってしまったがやっぱり俺はこの人を誰にも取られたくない俺だけを見ていてほしい。そう考えると俺って結構性格が悪いな…。でもそれでもいい俺はこの人の事が…。)

そのまま右腕の上にあげて彼女の頬に軽く触れながら言う。

「俺も好きだよペルちゃん」

「え……？」

「うん？」

俺が言うのとペルちゃんは惚けた返事をする。あれ？もしかして俺言うタイミング間違えた？

「~~~~~ッ！」

ペルちゃんの顔を見るとトマトみたいに真っ赤になってた。

「お、起きてるなら言いなさいよ！」

「いた！」

膝の上から地面に落とされる。

「ご、ごめんなさい！つい…。」

「気にしないで。起きてるって言わない俺も悪かったし」

立ち上がりベンチに座り直しす。

「いつから起きてたの？」

「えつと膝枕の時からです…。」

「なんでそのタイミングで起きるのよ！」

「控えめに言つて最高でした」

「この… バカ！」

「うわあ！」

今度は身体を横に押されまたベンチから落とされる。

「もう知らない！」

「悪かったって」

そつぽ向いたペルちゃんの頭を撫でる。

「こ、今回だけは許してあげる！だから… その… もっと頭を…」

「うんペルちゃんにならいくらでも撫でてあげるよ」

ペルちゃんはうれしそうな顔をする。

そして俺は一度撫でるのやめて今日呼ばれた本題に入る。

「それで今日はなんで呼び出したの？」

「この流れでそれを聞くかしら普通？」

「まあ一応ね」

「相変わらずねエル君は」

「人はそうそう変わるものじゃないよ。それになんかこの空気の方が俺らっぽくていいじゃん？」

「ふふ、確かにそうね」

「でしょ？」

そう言つて俺はペルちゃんの手を握りペルちゃんの方に向き直る。

「ペルちゃん。いや、ジュリエット・ペルシアさん。俺は幼い頃からあなたの事が好きです。俺と付き合ってください」

手は握ったまま頭を下げる。

「はい！」

手を強く握りかえしてくれるペルちゃん。

「じゃあこれでようやく……」

「ええ、恋人になつたわね」

「やった！ やつとだ！ ここまで長かつた……」

「本当よどれだけ私があなただの事を待つたと思つてるの？」

「うっ…… 言い返す言葉もございません」

「本当に昔からエル君は女心を分かつてないんだから」

「すみません…。」

「また今度じっくり教えてあげる！」

そう言つて俺に微笑む彼女の顔はオレンジ色の外灯で灯されより一層魅力的に見えた。

「それじゃあ今日はもう時間も遅いし戻ろうか」

「待って」

ベンチから立ち上がろうとするとペルちゃんに服の袖を掴まれる。

「もう少しだけ…だめ…？」

上目づかいで聞いてくる。可愛いなチクシヨウ。

「いいよ」

俺はまたベンチに座る。すると不意に右手を握られる。

「ペルシアさん？何をなさつてるのでしょうか？」

「だつてあの日から全然繋いでないから…いやだった？」

（そんな嫌なんてありえないです！むしろこっちからお願いたいだいぐらいです）

「いやじゃないよ！ただ久しぶりだから少し驚いただけだよ」

「それにしても手でかくなつたね」

「そりゃあ9年も経てば手ぐらい大きくなるよ。そう言うペルちゃんは…相変わらず

「柔らかいね」

「そこは男の子と女の子の違いよ。それにゴツゴツした手の女の子なんて嫌よ」

「まあ確かに・・・」

「それとエル君はまだあの夢を叶えようとしてるの？」

「うんこれだけは絶対に成し遂げたいことだからね」

「そっか・・・ 実は私ね最初の頃家の為に強くなつてそしてこの世界を変えようと考えていたの・・・ けど昔ある男の子と出会つたの。そしてその子の夢を聞かされたわ、最初には冗談だと思つたけどその子の目は口先ではない覚悟があつた。そして一緒にいるうちに気づいたら家の為よりその子の隣で一緒にその夢を叶えるところを見たいって思うようになったの」

「ペルちゃん・・・」

「だからこれからはあなたの隣にいさせて？」

「俺の方こそ君の隣にいさせてください」

「あ、それと犬塚から伝言よ」

「お、おういきなりだね・・・」

「『俺もエルの夢を手伝うぜ！』らしいわよ」

「そっか・・・」

「これから三人で頑張りましょう」

「うん」

それから俺らは昔みたいに手を繋ぎ話すこともなくただ座っていた。

次の日また今日も黒犬と白猫は対峙していた。そしてまた俺も呼ばれた。

「本当に飽きないなお前ら！」

「ど、どうしたエルいきなり大声なんて上げて」

「いやだつてさ疲れない君たち？毎日毎日黒犬が！白猫が！なんて言つて争うの」

「しょうがねえだろ東和国とウエスト公国は敵対関係にあるんだから」

「ロミオ…… 敵対関係つて言葉知つてたんだな」

「知つてるわ！」

「そんなくだらない事してないで早くしてもらえる？授業まで時間がないわ」

「だつてよ？まあ俺は戦うの嫌いだし、そもそも二つの国が敵対関係だったとしても興味ないから俺は戦闘に参加しないぞ」

俺が言うとロミオが蓮季を呼んで耳元で何か話している。

「わかつたぞ！」

ロミオとの話が終わると俺の前まで来て少し屈んで上目遣いで俺に言ってくる。

「蓮季は神崎に戦ってほしいんだゾ…ダメ？」

屈んでいるせいかもしれないも開けているワイシャツの第二ボタンから見える能満なお山が目に入ってしまう。そしてもう一声と言わんばかりに追い打ちをかけてくる。

「おねがい……」

今度は少し目を潤して言う。

「しよ、しようがないなあ、今回だけだか…ヒイッ！」

さすがにそこまでされたら断るのも悪いから「今回だけだからな」と言おうとしたとき、目の前の白猫から殺気がこもった視線が俺に突き刺さる。

その殺気のコもった視線を飛ばしている人を見るとペルちゃんだった。

（これはやばい…蓮季には悪いけど断らせてもらう。だって俺まだ死にたくないし）

「わ、悪いな蓮季俺は戦闘には参加しない」

「そ、そうか…」

俺が断ると蓮季はあからさまに落ち込んだ顔をしてもといた場所に戻る。

（なんとという罪悪感！でもここで断らなかつたら俺がやばい…！）

「どうやら茶番も終わったようね！それじゃあ調教してあげる！黒犬！」

そう言つて白猫全員が向かってくる。

(さっきの茶番を終わらせたの半分くらいあなたですよペルシアさん?)

それから時間が経ちようやく戦闘が終わった。

まずロミオとペルちゃん俺の夢を手伝ってくれると言ってくれたから戦闘するふりをしていた。ちなみに俺はお互いの寮生が一人に集ってリンチなどやりすぎが無いが監視していた。けどほとんどがきちんと戦っていた。いや、きちんと戦っていたって何だし……そして今。

「おい神崎いさつきはよくも邪魔してくれたなあ」

そう言つて俺に言い寄ってくる。丸流、古羊、土佐。

「おい！エルはお前らがやりすぎないようにしてくれたんだぞ！」

「そうだゾ！」

「うるせえな今俺らは神崎に話してるんだ。それに」

「てめえに」

「俺らの邪魔をしたらどうなるか」

「教えてやるよ」

綺麗に三人順番に俺に言ってくる黒犬問題児三人。

「だから表出ろよ」

俺の机を片手でドン！と叩く丸流。

「ええ… やだよめんどくさい。それに戦うの好きじゃないんだけど…」

「んな事知らねえよとりあえずお前は俺らの言う通りにすりやあいんだよ」

「めんどくさいなあそういうのはお昼休みにいくらでも聞いてあげるからとりあえず今は次の授業の準備しよう？」

俺が言うのと今度は土佐が俺の胸倉を掴んでくる。

「ごちゃごちゃうつせーぞー！」

本当にめんどくさいからロミオに助けると目線を送る。

「お前らしい加減にしろ！エルはお前らのためにやったんだ！」

ロミオが土佐の腕を掴みながら言う。

「うるせえー！」

土佐が腕を掴んでいるロミオを突き飛ばし古羊が突き飛ばされたロミオを足で踏んで動けないようにする。

それを見て俺はキレてしまう。

「おい…。」

「ああ？」

「こつちが下手に出てればよお、俺に対しては何をしてもいいし何を言ってもいい…。」

けどよ俺の大切な奴に手え出すのは許さねえぞ。いいだろう俺がテメエら三人いっぺんに相手してやる」

「お、おい待てエル！さすがのお前でも一人で三人を相手するのは無理だ！」

「そうだゾ！やめるなら今のうちだゾ！」

俺の胸倉を掴んでいる土佐の腕をほどいてロミオの前に行つてロミオの腹に乗つて
いる古羊の足をどける。

「え!? オイラ結構足に力入れてたよ！」

ロミオの手を掴んで立たせる。

「エル・・・」

「悪いね。俺は基本自分の事に関してはどんな事でも我慢できるけど俺の大切な奴に関しては結構我慢できないんだわ」

「そう言つてられるのも今のうちだぜ？」

「ああそうかもな」

「こいつ今自分で言つたぜ！」

丸流の挑発に俺が言うのと土佐がバカにしたように言う。それに対して俺は少しバカにした風に言い返す。

「今のは俺の事じゃねえよ。てめえら三人の事だ」

「このおー！」

それを聞いてすぐ目の前にいた古羊が殴りかかってくる。

「エル！」

「神崎！」

ロミオと蓮季が俺の名前を大声で呼ぶ！

「遅いよ」

そう言つて古羊のパンチを躲してそのまま足を掛けて転ばす。

「いつてえ！」

「てめえ！」

今度は土佐が殴りかかってくる。

「大振りすぎ。どういう軌道でパンチが来るかすぐ読まれるよ」

土佐の大振りのパンチを左手で受け流して古羊と同じように足を引っかけて転ばす。

「ロミオ悪いんだけどこの二人頼むわ」

「お、おう」

ロミオに転ばした二人を連れ行つてもらつて今度は丸流が俺の正面に立つ。

「結構やるじゃねえかお前」

「どうも。てかもうよくね？あと少して授業が始まるよ」

丸流に言う、「無理だな」と言つて構える。

「どうしてもやるの？」

「当たり前だ」

（これはまじで最後までやるやつですわ．．． やりすぎないように止めただけでなんでこうなつちやうんですかね．．．）

「はあ．．．」

ついため息をついてしまう。

「じゃあ、あれだお互い先に一撃入れたら勝ちでいい？」

「ああ」

「それじゃ．．．」

丸流との距離を一気に縮める。

「はえ!？」

そして丸流の顔めがけて拳を振るう。

それを見て反射的に目を瞑る丸流の顔の前で拳を寸止めする。

「．．．？」

丸流が目を開けたと同時におでこにデコピンをする。

「いっ!」

「はい俺の勝ちね」

丸流の肩に手を置いてロミオと蓮季に所に戻る。

「……………」

二人のもとに戻っても黙ったままだった。

「おーいロミオ、蓮季？」

二人の目の前で両手を振る。

「い、今なにしたんだ？」

「何したってデコピンだけど」

「いや確かにそうだけど俺が聞きたいのはそうじゃねえよ」

「もうデタラメだぞ……」

二人はやれやれと言った感じに肩を竦める。

「まあいつか、俺少しトイレに行ってくる」

—————

教室より少し遠いトイレに入り上半身の服を脱ぎ鏡に背中を向ける。

「なんで出てくるんだらう……」

鏡に映っていたのは『ダンまち』の世界でヘステイア様に刻んでもらったファルナ

だ
っ
た。

可愛いなチクシヨウ!

ダリア学園は全寮制ゆえに遊ぶ目的の外出は禁じられている。だが3か月に一度だけ買出しの名目で外出が許可されている。それが今日だ。

「神崎くん」

「一人？ 私たち今からダリアパークに遊びに行くんだけど神崎君も一緒に行かない？」

「あ、いや今日一緒に遊ぶ人がいるから」

「えー！ いいじゃん！」

「そういうわけには…」

自分は今とても困っています。丸流と土佐そして古羊の三人が絡んできて返り討ちにしたあの日からこんな感じにクラスの女子が話しかけられることが増えた。

「お待たせ」

「お、やつとき… た…」

待ち合わせしてた人の声が聞こえたからそっちの方に顔を向けると超絶美少年がいた。

「な、なにあの美少年…」

「そういうわけだから俺行くね」

そう言つて待ち合わせしてたジュリ男、もとい男装したペルちゃんと並び町まで歩く。

ちなみになんでペルちゃんが男装してるかというところ……

—————

外出日前日の夜噴水広場

「明日の外出日一緒に回らない？」

「いや、無理じゃない？」

「ふっふっふ、甘いねペルちゃん、実は」

今日持ってきた紙袋からあるものを取り出してペルちゃんの前に出す。

「何これ……？」

「なんとこれは演劇部から借りた東和民変装セット！」

「……………」

「これなら明日一緒に回れるよ！」

「……………」

東和民変装セットを見せるとペルちゃんは何も言わずなんて説明したらいいかわからないような顔になる。

「……」

「いや何か言ってる?」

「あなたはバカですか?」

「いきなり罵倒!? しかも敬語やめて!」

「無謀にもほどがあるでしょう!?!」

「そうかな?」

「バレたらどうするのよ!」

「確かにそうだけどこのままじゃあどこも遊びに行けないし……」

「はあ、考えておくわ」

「とまあこんな感じのやり取りが昨日の夜にありましてまさか本当に変装してくれるなんて。」

「本当に隠しと通せるのかな?」

「大丈夫ただの美少年にしか見えないから」

「それはそれでなんかいやなんだけど……」

「ペルシア様!」

二人で並んで歩いていると後ろからスコットが息を切らしながら変装しているペル

ちゃんに近づく。

(もうバレた!?)

「おかしいな確かにペルシア様の匂いがしたんだが…… いるのはバカ面の黒犬二人」
「バカ面って……」

(こいつ変装してるとはいえペルちゃんの事バカにしたぞ)

そしてスコットは変装したペルちゃんに気付かずまたどこかに探しに行った。

「私…… 匂う?」

「いや、匂わないから大丈夫だよ」

「そう? それより早く行こう?」

「うん」

ダリア学園から出てペルちゃんの案内でダリア街に来ていた。どうやら右側に東和国の店左側にウエスト公国の店が向こうまでたくさん並んでいた

「へえ、二つの国のお店が並んでるんだね」

「この街もダリア学園も元々東和とウエストの友好のために作られたんだよ。」

「元々、ね」

「今はいがみ合ってるけどいつか二つの国もきつと仲良くなると思うの」

(この風景を見てれば二つの国の友好のために作られたのはわかるけどそれは何十年前の話だ、ダリア学園の両生徒を見てたら今の二つの国の仲が悪いかがわかるしな。けどペルちゃんの言ういつかが来るように俺がダリア学園から変えてみせる)

「……ル君、エル君?」

「あ、ああ、どうしたの?」

「エル君の方こそどうしたの?なんか怖い顔してたけど」

「ちよつと考え事をね。それよりお腹すいてない?」

「まあ今日は朝ご飯をあまり食べてないから」

「じゃあ何か食べたい物とかある?」

俺が言うのと顎に指を当てて東和側のお店を見る。

「じゃああそこがいい」

ペルちゃんが指さしたお店を見ると拉麺と文字が書かれているお店だった。

「お、ラーメンか」

「らーめん?」

「うん、まあ入っていればわかるよ」

お店に入って開いている席に座りメニューを見る。

「なんか色々あるね」

「ペルちゃんはどれにする？」

「うーん、私はこれにする」

ペルちゃんが選んだのは辛いラーメンだった。

「じゃあ俺は無難に醤油ラーメンにするかな」

—————

ラーメンが来るまでの間俺らは今までのことを話していた。

「まあ初等部の頃の話はこんな感じかな」

「初等部の終わり頃には中等部の勉強が終わってるってどれだけ勉強してたのよ……」

「いやー初等部の内容が簡単すぎて先にやっておこうかなって勉強してたらいつの間にか終わってた」

「何よそれ……」

「お待たせしました！」

話していると頼んだラーメンが来た。

「じゃあ食べよつか。いただきます」

「いただきます」

まずはスープからいただく。

「うまいなこれ」

隣を見るとかりやいと言って涙目になっているペルちゃん。可愛いなチクショウ。ていうか割り箸を割らずに両手で一つずつ持って器用に食べている。

「もしかしてペルちゃん割り箸使ったことない?」

「割り箸?これのこと?」

そう言つて両手に持つている割り箸を見せてくる。

「うん、それなら俺が使い方を教えてあげるよ」

「お願いしようかな」

「オツケ。じゃあまずは真ん中に線があるでしょ?それで左右を軽くつまんで横に引つ張ると…」

パキ

「ほらこつやつて箸になるんだよ」

「えつと、こつやつて左右を軽くつまんで横に…」

パキ

「出来た!」

割れたことが嬉しいのか割れた割り箸を持つて俺に見せてくる。可愛いなチクショウ。ウ。

「それで使い方はここに人差し指を置いてその下に中指を置いて、そしてこつちの箸を

親指でこう」

「えつと… 人差し指でこうやって中指ではこうそして親指で… あっ」

やはり最初は上手いかならないらしく割り箸を落としてしまう。

「中々難しいのね」

「まあ初めてだからね」

俺は席を立ちジュリ男の後ろに立つ。そして右手を軽くつかむ。

「ちよ、なにを…」

「俺がこうやって教えるよ。んじやまず人差し指はここに置いて中指はここですそして親

指は…」

順番に教えて箸の動かし方も教える。

「とまあこんな感じかな」

「あ、ありがとう」

「冷めちゃうとあれだし食べちゃおつか」

「うん」

—————

お互いラーメンを食べ終わるとロミオと蓮季が入店してきた。

「あ、エルじゃねーか」

「おつすロミオそれに蓮季も」

「一人できたのか？」

「いや二人だよ」

二人は俺の隣に座るジュリ男を見る。

「犬塚この子すつごい美少年だゾ！」

「あ、ああ確かに美少年だな。けどなんかどつかで見たことあるんだよな」

ジュリ男に近づきジツと顔を見るロミオ。

「な、なんですか」

「いやなんかお前すげー見たことある顔なんだよな」

「でもわた・・・僕はあなたの事見たことないんですけど」

「そうなんだよな」

するとジュリ男が近づき耳元で喋る。

「どうするバレそうだけど」

「うーん俺はロミオになら教えてもいいと思うんだよね。俺らの関係を唯一知ってるし」

「エル君がそう言うなら私はいいいけど」

「わかった」

ジュリ男が離れ俺はロミオの方に向き直る。

「ロミオ少し話があるんだけど一回外行かない？」

「話？まあいいけど。そしたら蓮季先に座っててくれないか」

「わかったゾ」

俺はロミオを連れて外に出る。

「そんで話ってなんだ？」

「俺の隣に座ってた子いるじゃん？実は男装したペルちゃんなんだ」

「は？」

「悪いんだけどこれは秘密にしてほしいんだ」

「ちよちよちよつと待て、あの美少年が男装したペルシア？お前友達が多くないからってそんなこと言わなくてもいいだろ」

「本当だよ！それに友達がいなのは余計なお世話だよ！」

「ていうか男装したペルシアってまじ？」

「まじ」

「つまりデートってことか？」

「うん」

「ちくしょう！羨ましすぎる！」

(いや、地面に手をつけてそんなに悔しがらないで?周りの人の目を気にしてほしいんですけど...)」

「とりあえずペルシアが男装してることを黙っておけばいいだな?」

「頼むわ」

「じゃあ今度何か奢れよ」

「もちろん」

そして俺らが店の中に戻るとジュリ男と蓮季が仲良さそうに話していた。

—————

俺ら二人はラーメンを食べ終わっていたため長居するのも他の客に迷惑になるからと言って店を出て今はダリアパークに来ていた。

「すげえ!まるでどこぞのハイランドみたい!やっぱりダリアって名前がついてるだけあるわ」

「どこぞのハイランド?」

「あーペルちゃんは気にしなくてもいいよ」

「?!まあいいわそれより早く行きましょ!」

そんなにダリアパークが楽しみだったのか走って先に行ってつしまった。

「たく...まさかこうやって二人で遊べる日が来るとわね。まあペルちゃんは男装して

るけど」

「エル君何してるの！はやく！」

「今行くよ！」

（今だけはそういうの気にしないで俺も楽しむとしますか）

「何から乗ろうか」

「わた、僕あれ乗ってみたい！」

「え、あれはさすがにしょっぱなからレベル高くない」

ジュリ男が指さしたのはジェットコースターだった。

「だめ…？」

「くっ…」

（いくら男装とはいえ元が良いから上目遣いなんてされたら断れないじゃないですか）

「わかったよ」

「やった！」

ガッツポーズをした後スキップでジェットコースターの列へと向かう。本当は絶叫系は苦手だけどあんな風に言われたら行くしかないですよ…

そしてジェットコースターから戻った俺は気分が悪くなりベンチで座って休んでい

た。

「ごめんねエル君、私が無理させたばかりに」

「気にしなくてもいいよ苦手でも乗るって決めたのは俺だから。あと五分くらい休めば治ると思うから少し待ってて」

「うん…」

上を向いて休んでると突然右手を掴まれる。

「あのなにをしてるんでしょか」

「治るまでの間だけでいいからだめ？」

「…いいよ」

(上見といてよかったわ多分今の俺の顔赤くなってると思うし)

—————

五分経ち気分も良くなってダリアパーク巡りを再開して色々なトラクションに乗ってとうとう帰りの時間に近づいていた。そして最後にお化け屋敷行こうとなって入ったらペルちゃんがお化けが大の苦手だったらしく一人で先に出口の方に走って行ってしまいはぐれてしまった。

(ペルちゃんどこに行っただんだ)

「おーい！ジユリ男ー！」

気づいたら俺はダリアパークの入り口方にまで来ていた。すると先の方に池の前に一人で立っているロミオがいた。そしてその後ろから外出とかまじだりー、とか言つてたくさんのお土産を持っている土佐と古羊そして丸流がいた。

丸流がロミオを見つけると後ろまで近づき池に蹴り飛ばした。どうやらロミオは泳げないらしく溺れており丸流がロミオの頭を何度も踏んで顔が上がっては踏んで沈ませていた。

「あいつー！」

俺がロミオを助けに行こうとしたら丸流の後ろからジュリ男が現れる。

「その足どけてくれないかな」

「ああ？」

「そんな馬鹿でも僕の大切な人の親友だから」

「あー？見たことのねえガキだな」

丸流は犬塚とじやれていただけと嘘を言つてジュリ男に近づき不意打ちの目つぶしをする。ジュリ男はそれを避けて丸流の胸倉を掴み背負い投げをする。

「もう人を池に落としちゃだめだよ」

「はい……」

（ペルちゃん強くね!? え、なにあの子あんなに強くなったの? ていうかロミオが!）

――――

外出から帰って夜ご飯とお風呂も済ませて俺は寮から出て外を歩いていた。

(そういえばラーメン屋さんから出て他の店を見回ってる時にアクセサリーショップをでロザリオを見つけて店員さんにお守りとして大切な人に贈る物だと聞いて勢いで買っちゃったけど渡すの忘れてたわ……)

そんな事を考えながら歩いていると湖まで来てしまっていた。

「……結構風が気持ちよくて落ち着くな」

(はあ、ダンまちの時と歳が近いからなのか最近力を使わなくてもファルナが浮かび上がってくるんだよな。前までは力を使うときにしか出てこなかったのに……)

俺は一度深呼吸をして左手を下に向けてこの世界に来て数年ぶりにある言葉を口に
する。

『煉獄』

すると下に向けた左手に光の粒が集まり姿を現す。

「本当にこの世界は平和だな」

『煉獄』を鞘から抜いて平晴眼の構えをする。そして目を瞑り頭の中で『ダンまち』の世界で俺が一番一緒にいた人物を作り上げる。

頭の中で作り上げた人物が構えを取って戦闘態勢になる。そして作り上げた人物、べ

ルがステータスの俊敏で自分に襲い掛かる。

俺はそれを避けて武器を上から切りつける。それをベルはヘステイアナイフで受け止めて右足で俺の腹めがけて攻撃してくる。武器を腹に持つてきて受け止めても間に合ないから地面を思い切り蹴つて後ろに飛ぶ。

一度距離が開いてお互いに武器を構えてにらみ合う。

「エル君？」

すると突然後ろから声を掛けられる。

「ペルちゃん？」

—————

ペルシア side

私は今一人で寮の外に出ていた。

（今日はエル君の事色々知れたわね。まさか絶叫系が苦手だったなんてね。いつもは何かと平然としてるからなんか以外だったわ。それにあのラーメン？辛すぎよ！よく東和民は平気で食べられるわね！確かわりばし？だったかしらその使い方を教えてもらうときに後ろから優しく教えてもらえたしラーメンには感謝しないとね！）

しばらく歩いてしていると少し遠くから何か物音が聞こえた。

(何かしら?)

音のする方に近づき草むらに隠れて見てみるとエル君がすごく長い剣?を持って一人でなにかすごい動きをしていた。

少し様子見をしてると一度後ろに下がって動かなくなったから私はここぞとばかりに声を掛ける。

「エル君?」

「ペルちゃん?」

手に持っている武器を鞘にしまって私の方を見る。

「あ、えつと何してたの?」

「ああ少し修行してたんだ」

「修行?こんな時間に?」

「うん。ここすごく静かで湖がなんかすごく綺麗で落ち着くんだよね」

「言われてみれば綺麗ね」

「でしょ?それでペルちゃんはどうしたの」

「私はただ少し歩いてただけよ」

「そっか、と言ってエル君は草むらの上に座る。」

「ペルちゃんもおいで」

自分の隣をポンポンと軽く叩いて座るように促してくる。

私は促されるままにエル君の隣に座る。もちろん肩が触れ合うギリギリの距離で。

「今日は楽しかった？」

「楽しかったわよ」

「そっか…」

「エル君は、どうだった」

「もちろん楽しかったよ。でもやっぱり男装したペルちゃんじゃなくてそのままのペルちゃんとデートしたかったなって思うかな」

（そ、そんな普通にデートって言うなんてずるいわよ…）

「そ、そうねいつか普通に東和国やウエスト公国関係なくデ、デートしたいわね。それにそうできるようにエル君が今のこの世界を変えるんでしょ？」

「俺だけじゃないよペルちゃんも一緒に変えるんでしょ？」

「そうだったわね」

「あ、あとロミオもだ」

「あ、忘れてた」

「まあ地道に頑張ろうか」

そう言って私の手を握ってくれる。

(こういう事をいつも急にしてくるから本当にずるいわこの人)

「そういえばそのヘアピンってずっと着けてるの?」

「うんこれは私にとつてすごく大切なものだから」

「そっか・・・ ありがとうね」

エル君がさつきよりも強く手を握ってくれる。私もそれにこたえるように力を入れる。

「実は私この花の花言葉まだ知らないのよね」

「え、まじ?」

「ええ」

「調べなかったの?」

「うんお母様に聞いてもわからないって言ってたし、調べるのもなんか嫌だったからまたエル君と会った時に聞こうかなって」

「よく我慢できたね俺だったら絶対に調べる自信があるんだけど」

「私には我慢できる理由があったからかしら」

「我慢できる理由?」

「それは言えないわよ・・・ まあそれは置いておいてこれの花言葉って結局何なの?」

「言わないとだめですか?」

「だめです」

「えつと… あなたを… ける」

「え？よく聞こえなかったのだけれど」

「だから… あなたを想い続ける、つていう意味です…」

「そ、それつてあの頃から…」

「はいそういう事です」

「そうだったの!？」

「いやー渡した日に意味を教えてもいいかなって思ったけどなんだか恥ずかしかったから誰かに教えてもらおうか自分で調べてもらおうかなって思って渡したけどまさか今日までその花言葉を知らなかったなんてねー」

いつもみたいにおちやらけた感じで言う。

「恥ずかしいからつて…」

「まあ花言葉がわかったことだし結果オーライだね！」

「そういうことにおいてあげる」

私が言うのとエル君は立ち上がり目の前に浮いてるボートの横まで行く。

「ねえこれ乗つて少し向こうまで行くつつか」

エル side

ボートを漕いで少し離れてから止めて今日買ったロザリオを出す。

「ペルちゃんにこれあげる」

「ロザリオ？」

「うん今日アクセサリーショップ行つたでしょ？その店員さんにお守りとして大切な人に贈るって聞いて買ったんだ」

「それなら私も持つてるわよ」

そう言つて首にかけてるロザリオを外す。

「まじか・・・それならこれは俺が使おうかな」

「待つて！あのねウエストでは日々の祈りをロザリオに込めて大切な人に贈るのよ。だから恋人たちはロザリオを交換するの。それにこのロザリオはお母様に入學祝いにもらつたもので今日までずっと祈りを込めてきたものなの、それにエル君にもらつたこのヘアピンと同じくらい大切なものなの・・・だからエル君には私のロザリオを受け取つてほしいの・・・ダメかしら」

「俺の方こそそんな大切な物をもらつていいの？」

「うん大切なものだからこそエル君にもらつてほしいの」

「わかった」

「じゃあもうちよつとこつちに来て」

言われたとおり少し近づく。するとペルちゃんは俺の首の後ろに腕を回してロザリアをかける。

「大切にしてね？」

「もちろん！」

首に掛けられたロザリオをそつと撫でる。

「エル君は？」

「うん？」

「エル君のはかけてくれないの…？」

（この子さつきから一回一回の仕草が可愛すぎなんですけど！今だって上目遣いで聞いてくるし本当に可愛いなチクシヨウ！）

今度は俺がペルちゃんの首の後ろに腕を回して名前を呼ぶ。

「ペルちゃん」

「何？」

「J e t , a i m e d e t o u t m o n c o e u r . 」

そうやって俺のロザリオをペルちゃんにかける。

「えつとどういう意味?」

「教えな—い」

「いいじゃない教えてくれても!」

「や—だ」

「もう!」

ペルちゃんに勢いよく詰め寄ってくる。するとボートが揺れてしまいバランスを崩して俺にくつつついてしまう形になる。

「ご、ごめんなさい!今離れるから!」

ペルちゃんが離れようとしたため俺は両手で肩を掴みそのまま自分の体に引き寄せ
て抱きしめる

「な、ななななな何を!」

「お願い少しだけでいいから…」

「う、うん…」

俺が言うのとペルちゃんもそつと俺の背中に腕を回して優しく抱きしめてくる。

—————

「も、もういいかしら…」

お互い抱き合つてどれくらいたったのだろう。きつと五分くらいだろうけど俺から

したら十分いやそれ以上の時間にも感じた。

「ああ、ごめんつい」

「別にいいわよ……」

お互い顔を赤くして気まずい状態になる。

「も、もう時間も遅いし今日は帰ろうか」

「え、ええそうね」

船を最初乗った位置まで漕いでお互いにおやすみと言って自分たちの寮に戻ろうとする。

「エル君……」

寮に戻ろうとしたときに後ろからペルちゃんに声を掛けられそして……

「なっ!?!」

頬にキスをされる。

「じゃあ…… 今度こそおやすみ」

そう言つて白猫の寮へと走つて戻つて行つてしまった。

俺は何が起きたのか理解できず少しの間その場でただ立っていた。